



## 日本人が知るべき親日の歴史(第5回)

# ベルギー

株式会社せおん 代表取締役  
株式会社テイク・グッド・ケア 代表取締役 **越 純一郎**

親日国との関係史では、次の2点の考察を要す。

- ①親日性の歴史的理(なぜ親日となったか)
- ②両国関係に関する現代的課題

### 日本ベルギー関係の現代的課題とは何か

日本の皇室とベルギー王室は、他に例を見ない親密な関係にあるが、その歴史的理を大部分の日本人は知らない(官僚や政治家を含め)。

一般に各国は自国の近現代史、特に、独立、領土、戦争などについて、きちんと歴史教育を行っている。ベルギー国民も歴史を踏まえて、日本に対して特別な親日の気持を有している可能性はあるだろう。

だが、日本側の歴史教育は貧困だ。それによる両国民の気持のすれ違いを危惧するのは筆者だけであろうか。(尚、以下で【】内は資料Aの該当頁)

### 幕末維新期に早くも始まった友好関係

1830年の独立後、目覚ましい発展を遂げたベルギーは、列強に伍してアジアでの経済競争を開始、1866年、幕府と修好通商航海条約を締結する。

当初は清との交易が関心事だったベルギーだが、条約締結時には、日本こそ断然確実な交易成果を期待できる国だと認識し【P. 60】、岩倉遣欧使節の同国訪問時(1873)には、既に日本について詳細な情報と、明確な友好的スタンスを有していた。

岩倉は国王レオポルト二世に謁見し、ベルギー外務省のランベルモン男爵から、「工業国を目指す日本に対する情報、協力(人的/資本的)の提供」、「対日輸出(ガラス製品等)、対日輸入(磁器、漆器、綿、絹等)」のオファーを受けた。同年、初代特命全権公使シャルル・ド・グロートが東京に着任した。

### 明治憲法と日本銀行はベルギーがモデル

当時、独立から僅か30年のベルギーを、日本は大国の狭間で国防充実、産業育成に努める新興の

成功国と見て、幾つもの面でモデルとしている。

まず、明治憲法のモデルだとされるプロシア憲法(1850)は、そもそもベルギー憲法をモデルとしていた。そこで、井上毅は両憲法を訳出した「王国建国法」(1875)を司法省より刊行し、プロシア憲法を天皇大権を損わぬよう修正する際にベルギー憲法を参照した【P. 168】。

また、日本銀行百年史第一巻P. 119～によれば、パリ万博に赴いた大蔵大輔松方正義はフランスのセー蔵相からベルギー国立銀行をモデルとするよう助言され、加藤済にその研究を命じた。加藤はベルギー国立銀行にならって「日本銀行創立の議」「日本銀行創立趣旨の説明」を1882年2月に作成、同年10月、日本銀行は開業した。

### 更に、陸軍、警察、法制度、火薬でも

幕末のベルギー留学生沢太郎左衛門はコーバル火薬製造所で勤務しつつ学び、彼の持ち帰った技術、機械、図面によって、明治新政府は王子滝野川の陸軍火薬製造所で、黒色火薬の生産を開始できた【P. 84～85】。

また、陸軍、警察、法制度などの分野でも、ベルギーを参考にしたとの文献が多数残されている。

### 1893年、駐日公使にアルベール・ダネタン男爵

ベルギーは優秀な外交官を日本に送り続けた。多くは在任期間が長かった。グロート公使は1874年から10余年間に、日本の政治、貿易、朝鮮問題、ロシアの千島領有を分析した膨大な報告を本国に送った。優秀な外交官による客観的で冷静な分析/報告が、ベルギーの対日観形成に大きく貢献したことには、日本人として今でも感謝したい。

4代公使ダネタン男爵の17年間に亘る報告も、日清日露戦争の時期だけに、両国間関係に大いに貢献した。エリアノーラ・メアリー・ダネタン夫人も『ベルギー公使夫人の明治日記』を残した。

## 自らの調査により「旅順虐殺は捏造」と報告

今日では、旅順虐殺報道(米国「ニューヨーク・ワールド」紙)は、誇張に満ちた捏造だったと知られている(資料B、C)。これは歪んだ自己顕示欲に囚われたクリールマン記者が売名目的で書いたもので、実際にも米国政府はダン駐日公使に調査を命じ、彼は調査のうえ、「この記事は極めて煽情的で誇張に満ちている」と本国に報告している。

この時、ダネタン公使は実際に現場にいた仏国武官ラブリ子爵からの聞き取り調査等に基いて、下記を本国に報告し、ベルギーの外務大臣が日本に不利な結論をくたさないよう促した【P. 179】。

- ・虐殺報道は多分に誇張されたもの。
- ・殺されたのは軍服を脱いだ兵士。婦女子は殺されていない。事前に住民は避難済み。
- ・恐らくアジアでは初めて傷病者に配慮がされ、日本赤十字は完璧な仕事を遂行している。
- ・日本は捕虜についてジュネーブ条約(=赤十字条約)を遵守している。

ダネタン報告は、偏向／誤解の多い西欧での日本関係報道を是正／修正する努力にあふれている。日露戦争では、ロシアの黄禍論の不当性を訴えた。1910年、彼は日本で倒れ、今は雑司ヶ谷に眠る。

## 第一次世界大戦下のベルギーと日本(1914/8～10)

ドイツに攻め込まれたベルギーがル・アールに臨時首府を置き、陣中の国王アルベール1世が仏国境近くの寒村に追い詰められるなどの状況は、日本では連日報道され、国民は大いに同情した。

村山龍平大阪朝日新聞社社長は、国王陛下の「御勇武を欽仰し奉り」、年来愛蔵せる名刀「備前長船」を陛下に奉献せんと決意した。その使者となった欧州特派員杉村広太郎は、ベルギーは「意気の国」で、「人道と文明と自由との為に、其の身を殺して働いた点」を高く評価せよと報じた。【P. 275～】

## 関東大震災(1923)とベルギー【第三部第六章】

ベルギー全土に日本支援の渦が巻き起こった。全王族が後援する委員会が「日本の日」を定め、日本支援のための講演会、バザー、コンサートがベルギー全土で行われ、教会も芸術家も協力を申し出た。その時に全国に配られた文書「元兵士たちへ」には、次の趣旨が書かれていた。

勇敢なベルギー兵士は、日本郵船がル・アールまで運んだ日本の煙草、茶、鉛筆、薬品類を忘れてしまい。それには心のこもった言葉が添えられて

いた、「私たち日本人はベルギー軍が示した忠誠・勇敢・名誉という3つの徳を示す“忠勇義烈”という鉛筆を贈ることを幸せに思う」と。

ベルギーは、米英に次ぐ金額の義捐金を日本に寄せてくれた(約250万フラン)。人口規模を勘案すると莫大な金額で、ベルギーは国を挙げ、物心両面の支援を日本に贈ってくれたのだ。

日本では、「受けた恩は石に刻む」とも言う。ここで我が国の歴史教育が貧困では余りに残念だ。

## バツソソピエールと安達峰一郎

この両外交官は、極めて重要な役割を果たした。バツソソピエール大使は、1920～39年の約18年間、関東大震災を含む激動期を東京で在勤した。彼は日本をこよなく愛し、その曾孫も、近年、東京のベルギー大使館で公使の要職を務めた。

安達峰一郎は1917年にル・アールの臨時首府で信任状を提出後、10年に亘り公使／大使として両国関係の発展に努めた。彼は日本近代史に特筆すべき外交官／国際法学者で、国際連盟日本代表、常設国際司法裁判所裁判官／所長を歴任。オランダ政府は国葬をもってその死を悼んだほどだ。

安達峰一郎がベルギーから転任する際の盛大なる送別晩餐会の意義深さは、両国関係の発展に関する彼の偉大な功績をよく示していた【P. 352～】。

## 皇室とベルギー王室の例を見ない親密な関係

2016年、「日本・ベルギー友好150周年」の祝賀は、日本側名誉総裁に天皇陛下(当時。現上皇陛下)、ベルギー側名誉総裁にフィリップ国王陛下が御就任されて挙行された。かくのごとく、他に例のない親密な関係には、歴史的な理由がある。

それを知る努力／知らせる努力は最低限の課題で、その先に更なる現代的課題を見出すべきだろう。

注:資料AのP. 178にある「ジュネーブ協定」は、「ジュネーブ条約」の誤りなので、本稿では「ジュネーブ条約」とした。

資料A: 磯見・黒沢・櫻井「日本・ベルギー関係史」(白水社)

資料B: 宮脇淳子「満洲国の真実」第1章(扶桑社新書)

資料C: 渡辺惣樹「日米衝突の根源」13章(草思社)

資料D: 小和田恒「世界平和に尽くした『国宝』」日経2006/6/14

資料E: 公益財団法人安達峰一郎記念財団 HP.

資料F: やまのべ町(山形県)HP. 「“世界の良心”と称えられた安達峰一郎」

資料G: 外務省在ベルギー日本国大使館ウェブサイト 「大使のよもやま話」第31回(2013/10/1)